

アニメ「ポケットモンスター」平成無印からのニャースの 年齢設定についての簡単な考察

2021.07.17 作成

m. Ikegaya

1. はじめに

ニャースの具体的な年齢を示す資料は見つけれられない。重要なキャラクターにもかかわらず設定そのものが無いこととなっている。しかしながら、アニメ銀河鉄道 999 の演出への参加から数多くのテレビアニメーションの総監督を務めた湯山邦彦がそれを行なわないことは考えられない。アニメ「ポケットモンスター」平成無印（以下：アニポケ）のロケット団登場回におけるニャースの言動・行動からはコジロウやムサシとは明らかに違う時代に価値観が形成されたようにも考えられるが、事実はどうであろうか。ここではニャースの生い立ちを示した回であるアニポケ第 72 話「ニャースのあいうえお」を元に、ニャースの年齢を考察していく（第 72 話からの各種出典については本編動画を参照）。なお、ポケットモンスターを見始めて数日であるので各種不備はご了承願う。

2. ニャース誕生からの台詞、情景のとりまとめと解説

以下、ニャースの回想シーンよりポイントとなる点

まず、冒頭ニャースが捨てられ？入れられているザルには新聞の敷物があるので主人がいた可能性を示唆している。

「我輩はニャースである、名前はまだ無い^{*1}、

雨宿りのシーンにて登場する軒下の自転車の形状、

野球の練習をする指導者のジャージの色、

木造小学校の意匠、

木に吊るされた状態で見るローマの休日を模した映画に対して「昔ハリウッドという街で作られた映画というものです」とした上映者のコメント（なお、ローマの休日は 1953 年に上映の映画）、

観客の座るモノが小さなムシロの組合せであること、

「長いトンネルを抜けるとそこはハリウッドだった^{*2}、

以下、現在におけるニャースのシーンからポイントとなる点

ハリウッドに来て、「変わってしまったにや、この街も」、

「誰にも人には言えにやいこともあるものにや」、

「暫く一人にしといてくれにや」、

「本当にこの街は変わった」、

街並みの荒廃ぶりの絵から勘案すると、大きく衰退を始めて 10 年程度経過していると考えてよいだろう。アニポケ平成無印が 1997 年ということから、回想シーンは 1987 年前後となるのではないだろうか。

なお、ニャースはこの回を通してトレンチコートを着ており、上記の台詞のみならず、後に登場する同種のポケモン「マドンナ」とのやりとりである「昔のことは忘れた？そんな先のこと

は解らない？」といった台詞からも断定できるように、映画「カサブランカ」^{※3}に内の主人公リックになりきっていることが伺える。これらはニヤースの具体的な内面に触れることの出来る非常に貴重なシーンともいえる。ちなみに、「いけない、こんなに場所はマドンナちゃんのいるところじゃない、にやーが助け出してやる」という言葉もカサブランカのクライマックスシーンと重なる。ニヤースが観た映画のひとつであると共に、心酔する人間のタイプを示している。

3.登場する事物からの解説

ハリウッドで登場するマドンナの飼い主は映画「プリティー・ウーマン」^{※4}内で用いられるホテル利用者送迎用のキャデラックのストレッチリムジンの色違い(図1)に乗っていることが確認できる。極めて特徴のある車両であり、トランク上部のアンテナやヘッドライトの形状から容易に判断がつく。



図1 マドンナの飼い主が乗る同型車両

本車両は映画「ウォール街」^{※5}においてもマイケル・ダグラス扮する主人公の株式ブローカーのゲッコーが使用するものとして登場する。これは当時のアメリカ合衆国における経済的な成功者を最も象徴する一台と言って良い。車両に関してもアニポケ制作サイドが意識していないことはありえず、上記映画を参考にしてのことだろう。よって、マドンナの旧飼い主もこうした一過性の成功者の一人として画かれている。ちなみに、車両の年式からニヤースがハリウッドを模したハリウッドに行った年代は1980年台中盤から後半と推測できる。さらに、「ウォール街」の続編である映画「ウォール・ストリート」^{※6}における主人公ゲッコーの出所シーンにおける所有物の返却シーンに映し出される移動式電話の形状がショルダーフォンよりも一世代後の移動式電話(図2)であることが確認できる。肩掛けタイプからハンドタイプになるのは1987年以降のことである。



図2 移動式携帯電話^{※7}

上記から、年代が特定できる。アニメ「ポケットモンスター」の湯山邦彦監督がディテールに拘り年代と場所を暗に示す意図を持った各シーンから、ニヤースがハリウッドを訪れたのは1988年の前後1年に絞り込まれる。

4. ニヤースの年齢についての考察

ニヤースがかつて滞在したハリウッドからの時間の経過は、アニメ「ポケットモンスター」の初回放送の1997年と組合せると、各事象からほぼ10年となる。また、ニヤースの滞在期間は人間の言葉を学んでいくシーンの背景から最長でも1年程度と考えればよい。ここで問題となるのはニヤースがハリウッドに出向いた年齢になるが、アニメ「ポケットモンスター」の主人公であるサトシのポケモンマスターへの旅立ちの年齢が10歳（成人とみなされる年齢）であることから、それに合わせる形を取ればニヤースの設定年齢は20歳ということになる。アニメ「ポケットモンスター」の1997年からこれを引けば、1977年前後に誕生したことになり、第72話のニヤース登場から始まる台詞や情景と当時の人間の実社会における風土や文化が一致する部分が多々見られる。地域差はあるものの1977年+10年頃まで生まれた町で過ごしたと考えれば描かれた野球を指導している人間の着ているジャージの色、映画鑑賞時の敷物がブルーシートではなくムシロであることにも納得がいく。軒下に置かれた自転車も然り。また、木造校舎であることから、そこは多摩や高蔵寺、千里といったニュータウンではない過疎が進んだ地域とも推察される。1952年上映のローマの休日や昔存在した映画として取り上げることも整合性がとれ、映画に興味をもったニヤースがそれ以前の名画カサブランカにおけるハンフリー・ボガートの演技に魅せられ、マドンナをイングリッド・バーグマンに重ねたことも自然な流れといえる。

なお、ロケット団のコジロウやムサシの生い立ちを知ることの出来る回もあるが、ニヤースの精神年齢は彼らとは随分かけ離れて上のように思える。これはニヤースが極貧の野良ニヤースであったこと、その極限の状態を生き抜くこと、生き抜く中から映画史における名作に触れていることがそのようなセンスを養う元となったのだろう。さらに、一行程度のセリフとはいえ漱石や川端の有名な著作をあえて引用していることも、こうした文学に多く触れる機会があり、ニヤースの内面にはとても強い人間への観察力が組込まれていることを示唆している。

以上から、ニヤースは団塊ジュニア世代が多く生まれた1977年生まれの20歳として結論付けるのが自然ではないだろうか。ポイントとなる点は初めてハリウッドへ向かったニヤースの年齢をどう仮定するのだが、やはりアニメ「ポケットモンスター」における成人の定義たる10歳に当てはめて考えるべきだろう。

<参考>

- ※1 夏目漱石「我輩は猫である」の冒頭文
- ※2 川端康成「雪国」の冒頭文
- ※3 ワーナーブラザーズ配給：マイケルカーティス監督 1942年上映
- ※4 ワーナーブラザーズ配給：ゲイリー・マーシャル監督 1990年上映
- ※5 20世紀FOX配給：オリバー・ストーン監督 1988年上映
- ※6 20世紀FOX配給：オリバー・ストーン監督 2011年上映
- ※7 ダイヤモンド・オンライン「<https://diamond.jp/articles/-/180183?page=2>」